K

綾乃

K

Kはその席の中でも目立たない、うすぼんやりとした、輪郭の曖昧な男だった。そう言った男によくある、母親が好みそうな服ではなく、黒いジャケットを着ているので、肩から胸、腹にかけてだけがはっきりとしていた。
隣に座るSはKをけなしながら誉めた。優良物件。その言葉はKより存在感の強い人間に当てはまる気がした。
その会が終わって、Kは私を家まで送ると申し出た。食事をしていたのは、駅前の居酒屋で、私の家から十五分程のところだった。
「家まで十五分かかるけど」
私が言うと、Kは鈍い色の鍵を見せた。
二人でメットを被り、Kの背中に体をくっつけた。
「だから一滴も飲まなかったのね」
Sから、空気が読めない、飲め、と言われてもKは笑ってやり過ごしていた。
黒いバイクはジャケットと同じようにKに似つかわしくなく、黒い馬に乗った農夫のように思わせた。
「しっかり掴まっていて」
Kは呟くと、夜道を走り出した。
次の角を右。左。それ以外の会話は、エンジンの音に掻き消されないよう叫んでまでしようとは思わなかった。ただ、Kの背中の暖かさと、メット同士がぶつかる振動だけを感じていた。
私の家の前に着くと、私はメットをKに手渡した。Kもメットを外し、わたしは、おや、と思った。
この時初めて、Kが整った顔立ちをしていることに気がついた。どこにでもありそうな目に、眉、鼻と口。人の顔を平均すると美しい顔ができると言うけれど、Kはそんな、いや、それを控えめにした顔立ちをしていた。
「Yさん」
と、Kが私を呼んで、
「いえ、なんでも」
Kは微笑を浮かべると、バイクに再び跨がり、走り去った。
部屋に入り、服を着替え終わった頃には、私はKの顔を忘れていた。
黒いジャケットにひょろ長い手足。バイク。
しかし、あの微笑する口元だけは――そして、そこから発せられる優しい声だけは頭から離れなかった。
「乗馬をしにいきませんか」
そんな冗談が浮かんでくすりとわらった。
Kを黒い馬に乗せたら、私はどんなに笑うだろう。